

(5)問題意識の持続性

関東大震災が丸山の知的成長においてもった意味としてもう一つ重要な点は、問題意識の持続性が見られることである。震災時の体験を綴った作文が『恐るべき大震災大火災の思出』として製本されたのは、震災から1年近く経ってからのことであった。甘粕事件を思い起させた特高刑事とのやりとりは、震災から10年目の年に行われている。



震災時の丸山の体験が、特殊なものであったとは考えにくい。当時、東京や横浜などに住んでいた同世代の少年少女の多くも丸山と同じような状況に置かれていた。しかし、戦争体験よりもむしろ強烈だったというほどの深刻さで、のちのちまで震災の体験を意味づけていた者は、どれほどいたであろうか。丸山は、震災の際に直面した問題を意識しつづけた。それは、母のことばに触発され、自分なりの知性の働きによって対象化されたものであったからであろう（画像：小学校時代の丸山眞男〈丸山彰氏提供〉）。